



六花

11

2020

りっかはいくかい

10月12日 ことり祥月命日

ことり来る迦陵頻伽の太子堂
コスモスや播磨風土記の丘の風
風寒く播州平野彼岸花
水際に散りて美し萩の花
濠澄んで国宝伽藍鳥の声
経仕舞ふ三重の塔天高し
くびれ腰あいたた観音艶冶なる
横積みの書が雪崩れけり昼の虫

笹村政子入院

秋風に吹かるともな奪はれそ
木犀の香にのけぞつてをりにけり
黄鐘調の鐘秋天に咲きにけり
秋うらら新人二人見込みあり
弟子の句に驚きながら爽やかに
正座して秋冷に膝くづれけり
菊花賞寺にまねきのお昼飯
二三日顔を見せざる秋の蜘蛛
秋冷や夜遊びに猫また出てゆく

▽田代青山さんの「星だより」の紹介記事を書こうとして「かはたれ星」は夜明けの明星と知った。「かはたれ」と夕暮れの「誰そ彼」(たそがれ)と混同して少し違った。

▽温泉から上がって、湯冷ましに寝転んで文庫本の「古今和歌集」を眺めていたら887に「野中のしみ水」を見つけた。註に「野中の清水」と呼ばれて、古くからあるものが、あったので「あろう」と書いてある。そこで「日本古典文学

大系」を帰宅してあらためて紐解いたら文庫本と同じことが書いてある。「大辞泉」で調べてみると和歌山ともう一つ野中にわき出る清水。特に、播磨(はりま) 国印南野(いなみの)に あったという清水。冷たくてよい水であったが、のちにぬるくなってしまうという「歌枕」と。稲美町のがその泉だと思ひ込んでいる。

新豆腐



笹村

政子

坤 巽 櫓 や 梅 雨 滂 沱
熊笹の縞のさやかに梅雨明くる
水桶に山のひかりや新豆腐
人込みに手を見失ふ夜店かな
糸とんぼ風を残して消えにけり
盆道に先ゆく影のありにけり
手におくれ足を運べる踊かな
ゆるるたび風が色なす女郎花
飛び交はす鯿にあかねの空のあり
捨てやうか夫の遺せし竹婦人

△坤巽櫓（ひつじさるたつみやぐら）やと訓む巽櫓・坤櫓は日本に12基しか現存していない明石城の貴重な三重櫓。「六花」はここで笹村志方永田の世話で十三年も毎月の吟行Rこう会をしている。滂沱の雨は喜びの音△新豆腐で山水を称えた挨拶▽人込みに手を見失うとはすばらしい。誰だろうかと想像力を刺激する▽糸とんぼも風になったというメルヘンがある。思わず姿を追っている読者がいる▽「先逝く影」が佳い。だけは述べてないのが現実を少し離れさせてさすが。真似ができない独創▽盆踊りの様子を実写発見。手と足がばらばらのようで不思議とつながっている日本のリズムをつかみ取った▽見事な前進を見せる若さが衰えない▽女郎花に風が触れると色なすという審美眼がすごい俳人には審美眼が根底に要る▽夕方のボラがさかんに飛び茜色の飛沫が見える写実的で幻想的。今月も政子の力作がそろそろ。

夢風撰巻頭

死ぬふりの千両役者床の蜘蛛

草場つくし

しぬふりのせんりようやくしやゆかのくせくやびりへいし

役者は板（舞台・床）で死ぬば本望。千両役者とは千両の出演料を取れる役者で初代団十郎が初めてという。その初代団十郎は舞台の上で相手役に本当に刺されて死んだ。その真に迫った演技に観客は「さすが、千両役者！」と喝采を送ったのかもしれない。が農村歌舞伎では掲句のような場面もあったと思われる。倒れた役者は目の前の蜘蛛に、ぎよつとして大声で悲鳴を上げたか身じろぎ一つしなかつたかどちらかである。掲句の作者は芝居の内容よりも役者がどういう行動をとるのかに注目した。役者がギヤーツと声を立てるのか、村の千両役者らしく身じろぎもせず死んだふりしているのかを言わず、読者にあれこれ想像させて楽しむ余韻を残してある。「貴方ならどうする？」という曲が脳裏に流れて。

葛ざくら

盆が来るゆつくり伸ばす古提灯
 かの店に小餅の予約盆用意
 盆念仏さ夜吹く風に乗りきたる
 飾られて草の匂ひの施餓鬼棚
 ヴイオロンや初風かよふストリート
 林火忌の淡きひかりに葛ざくら

▽白南風とは梅雨が明ける6月末ごろから吹く南風。やと梅雨が明けたという嬉しい気持ちになる小エビの動きに添う△桂林の墨画を描こうと思いついて硯を洗った。が季語の本意は七夕の短冊に書く墨をするために硯を洗うこと▽藪枯が伸びて蝶を狂わせた。人も動物も狂う物は様々だが藪枯らしに狂わせられたというのが面白い。料理するとワラビを少し硬くして、辛くしたような味で、何ともいえぬ旨みもあるらしい△墓洗ふは盆(秋)の季語、盆念仏(ぼんねぶつ)とも。ヴィオロンはパイオリンのことでフランス語のみ。昔上田敏訳の詩集にさかんに使われた懐かしい音。初風とは秋の初風のこと。ヤス子は文学少女時代にもどる▽林火(りんか)は大野林火「ねむりても旅の花火の胸にひらく」で有名である。その林火の弟子松崎鉄之介にヤス子は俳句を学んだ。桜の葉で包んだ葛餅が好物だったと思っている。

ソーダ水

花魁草なまめかしくはあらねども
 ダリア咲く少女の頃に見し色に
 みつ豆や遙かかなたに青春は
 蝉時雨一人暮らしに馴れずをり
 ソーダ水一口ごとに瞬けり
 血の色に透ける指先大西日

▽蝉の鳴き声がうるさい。一匹で百匹分の騒音という
 のが唐詩的な把握▽入院していた夫が明日退院して来るといふ。この欄を書いているときにご主人の訃報を受けた残念なことだがご冥福をお祈りする△寝に付く時には風鈴を外すと。涼し気な音も寝ていて耳に付くという矛盾つを突いた。人間の複雑な感情を詠んだ哲学的思考。▽炎天に老犬は可哀そう。日傘をさしかけても地熱で犬は弱っている愛犬家のようなのでそうでない▽西日に手をかさずと指を通う血が透けて血が煮え立っている▽ソーダ水の炭酸ガスに刺激を受けて瞬けりという、確かにソーダ▽一人暮らしは心のバランスが気が付かないうちに崩れる▽花魁草は目ほどには艶めかしくはない。でも言葉の力はすごい。章子は身辺を詠えば力を發揮する。それを持続しているのはさすがである。今回はご主人の入院で違った自分の世界を覗いたのだから。

志方 章子

一匹の蝉百匹分の声で鳴く
 髪洗ふあしたは夫の退院日
 寝る前に風鈴外しおきにけり
 老犬にピーチパラソル差し掛くる
 血の色に透ける指先大西日
 ソーダ水一口ごとに瞬けり
 蝉時雨一人暮らしに馴れずをり
 みつ豆や遙かかなたに青春は
 ダリア咲く少女の頃に見し色に
 花魁草なまめかしくはあらねども

昼寝覚め

何も彼も中止で閉ざし秋猛暑
汗拭きの向う鉢巻よく似合ふ
揺れ通す夕陽にまぶし鳥威
庭仕事手休めの風涼新
病葉のはらりと落ちる目の前に
スクールバス午後は水泳行きとなり
赤蜻蛉一気に湧きて触れもせず
赤蜻蛉どこから湧きてどこへ消ゆ
新聞を畳み直して昼寝覚め
信号変ったワゴンサンダラス

▽新聞を昼寝から覚めて畳み直すというのはさすがである。昼寝の前に一度畳もうとしたが、眠くて乱雑に畳んだ。一眠りして頭がすつきりしたら、あらあら、こんな畳み方をしてと改めて畳みなおす作者の几帳面さが出ている。普段の生活から名句は生まれるという見本で夢風撰候補▽向うハチマキは、頭の鉢に手ぬぐいその他の布を巻く習俗。古くは抹額(まつこう)または末額(もこう)といった。粋な巻き方でよく似合っているよというのである。▽鳥威は近年ではキラキラ輝く材質でできているから、夕日が射すと鳥ばかりでなく人間様にもまぶしいのである。▽目の前に夏の病葉が秋にもならないのはらりと落ちる哀れを見ている△赤とんぼはいつの間にか増えて、いつの間にかどこかに消える。「とどまればあたりに通じる。中村汀女」に通じる。

新涼

新涼や笹をこぼるる水の音
梅もどき蔓をたぐればこぼれけり
軒先を七夕竹のはみ出せり
蟬の殻そのままにして墓洗ふ
燃えつきて風のもてゆく芋殻かな
竿灯を立て直したる男かな
広がれば闇のしりぞく踊かな
鬼灯を鳴らして母のくつろげる
波に入り精霊舟を押しやりぬ
鹿垣に狭ばまりみたる故郷かな

▽水音にもいろいろあるが不二男は笹をこぼれる音に秋を聞き分けている。その枯れた感じが地味だがうまい▽ほおずきは女性の玩具といおうか、口慰みといおうか母親は鬼灯を鳴らしながらくつろぎ少女に帰っている。それを温かく見守っていた少年時代の母恋。同郷の岡本高明は父を恋い、不二男は母を恋う。夢風撰候補▽芋殻で送り火を焚いた。それが燃え尽きると灰を風が攫っていった。風は精霊である△蟬の殻の付いた墓石を洗うのに俳人らしく配慮したのである。その憐憫の情▽梅擬の句は季語「蔓たぐり」で、秋になつて枯れ蔓を片付けているときの経験であろう▽新涼を感じるのには笹をこぼれる水の音であるという独自の比喩△踊りの句は理屈が勝っている。

月下美人

断崖の裾に蓮田のふくらめり
 水音に揺れあはあはと雪の下
 ひとり生くことにも慣れて大暑来ぬ
 蓮の葉のゆらぎに吹かる蝶のあり
 待ちわびてやうやく会へし月下美人
 葉隠れに雨の色して蓮の露
 踏み石を一つ飛ばして鴨足草
 惜しみなく色を尽くして散る蓮
 大安のひと夜はかなし月下美人
 水中に縞目のゆがむ西瓜かな

▼断崖と蓮の浄土。飛び降りたく
 なるではないか▼雪の下(鴨足草)
 は句のように白く淡い。それを一
 つとばしに歩くのが句の眼目。鴨
 のように不安定な歩き方に通じよ
 うか▼暑さにもめげずもうそろそ
 ろ気持ちの整理も出来て、一人で
 前向きに生きて行くことにもなれ
 て、という時の流れを知った心▼
 蓮の池に吹く風の蝶も涼し気▼月
 下美人の咲くのを心待ちにしてい
 た喜び▼蓮の葉にまろぶ水玉が雨
 の色であるという気づき▼蓮の花
 が色を尽くして散った。そのあと
 蓮の実が飛ぶのを予測させる▼
 せっかくの大安なのに月下美人が
 一夜で散ってしまうのは寂しいで
 はないかと。▼西瓜の縞模様は冷
 やされる水にゆがんでいるという
 写生句。夢風撰候補。

鹿の子

大粒の雨たばしれる植田かな
 荒梅雨や大池端の一軒家
 笹飾り竜王雨を止めたまへ
 山裾の女宮司の白作務衣
奈良三句
 夏服の女の目見や阿修羅像
 山の辺の道のはじめの鹿の子かな
 青芝の子鹿にものを言ふ童
 真夜中を叩き伏せたる送梅雨
 大祓 大提灯を真正面
 不死男忌や黴の臭ひに横たはり

▼たばしれるの「た」は接頭語
 激しく走るある△荒梅雨の句は蕪
 村のような句。蕪村の句に通じて
 浮世絵にしてもいいような光景▼
 笹飾の句は雨乞いの反対で大雨を
 どうか沈めてくださいと願う。竜
 王が雨を降らし民を困らす、逆
 に日照りに雨をもたらす救いの神
 でもある。宝井其角は「遊ぶ田地
 (夕立)や田を見めぐりの神なら
 ば」と詠った▼阿修羅像は赤い顔
 をした夏目雅子に似ている▼鹿の
 子は「道のはじめの」のリズムが
 良い。材料も「山の辺の」と「鹿
 の子」が溶けあう。「山の辺」と
 は奈良と桜井を結ぶ古道。行の作
 品は万葉、古今との融合に未開の
 活路を探るのか▼真夜中を「叩き
 伏せる雨」という強引な措辞表現
 も送り梅雨に相応しい▼しとしと
 した走梅雨に対して降り収めの
 荒々しい降り方の対比が見事▼大
 祓とは夏越の大祓である。「大
 提灯を真正面」という思い切った
 構図が眼に浮かぶ。

夜長

流行あり携帯扇風機買はず
 翔ける透かしの鳥や奈良団扇
 残されし直哉旧居の苔の花
 急流に底叩かるる舟遊
 御供の柿熟柿になりにけり
 初秋の茄子大盛で戴きぬ
 子ら去りて一村消えし曼珠沙華
 野分来る予報の出るや風止まる
 ラップの端まだ探しゐる夜長かな
 蚯蚓鳴く彼等も無呼吸症候群

△流行りあり、とは廢れもあると
 いうこと。この夏大流行りの携帯
 扇風機だが、冷静に見るとどうせ
 はやりすたがりがあると▽そらをか
 ける鳥の透かし模様彫つてある
 なら団扇はならしく品がいいと
 いう△志賀直哉旧居に行つてみ
 た。今苔の花が咲いて直哉もこれ
 に癒されたであろう▽急流下りの
 船底が荒波に突きあげられて客は
 悲鳴を上げる「底叩かるる」は主
 宰も最上川で詠んだが捨てた。▽
 秋茄子を大盛で頂き大酒を飲ん
 だ、と井伏鱒二先生のように▽子
 どもたちが去つて、村は静まり返
 り、村ごと消えたように思える寂
 しさ▽ラップの端を探しているう
 ちに時間がたつてすつかり秋の夜
 長を費やしたよ、という自虐。夢
 風撰候補▽ミニズも無呼吸症候群
 のように息継ぎがない鳴き方。

愛の鍵

緑風の木椅子に渡り来たるなり
 南風の忽ち来たる辻に入る
 落蟬と空蟬並びありにけり
 冷房の効きたる部屋に居坐りぬ
 夜明け待ち外に出るなり蟬しぐれ
 盆用意終へて夜空を仰ぎけり
 盆用意終へてアルバム開きけり
 泊まり合ふ子連れの姉妹盆休み
 炎天下坂下る人上る人
 水色の空の中なる夕焼雲

▽落ち蟬と空蟬が並んでいるのは
 皮肉。幾日かこの世に生きた蟬同
 士である。どちらにも未来は短い
 のであつて哀れなものである△夜
 明けを待つて戸外に出るとすでに
 早起きの蟬がわんわん鳴いている
 よという△盆の用意をしていてふ
 と昔の我が家のアルバム取り出し
 て偲んでいるのだ。きつと幸せ
 だった家族の笑顔が沢山あるのだ
 ろう▽わが子が子供を連れて帰省
 した。それぞれに子供があつてに
 ぎやかな盆の夜である▽炎天下の
 句が佳い。炎天下の坂道を下る人
 もあれば上る人もあるのだ。これ
 が世相であるなあという感慨。万
 年青は実には句が上達して上手く
 なつた。すべて努力の賜物であ
 る。水色の空の中の夕焼雲も大変
 良い。

永田万年青

田尻 勝子

秋風や肉片に亀喰らい付く
 夜の空人各れ各れに月一個
 蚊遣香人居ぬベンチに立つてをり
 窓の灯のおよばぬ先や虫時雨
 この乳房憂し炎天に沸騰す
 台風が始まり鳥の空流る
 木洩れ日になりたるつもりの鶉かな
 朝寒や言争ひて勝ちし夢
 月の路地行けばくさめの聞えたる
 椎茸を焼いて独居の果思ふ

▼憂き乳房が炎天の暑さに沸騰しているという。夢風撰候補▽人それぞれに一個づつ月があるという哲学的仏教的な捉え方が佳い夢風撰候補▽木洩れ日のような鶉という比喩が独創的、今月の田尻は佳句のオンパレード▽玉石混交だがこういうところが田尻らしい。△月の路の句も俳味があつてすばらしい。夢風撰候補。▽秋風と亀の生きる食欲とが不気味に響く▽「憂い乳房」が暑さに沸騰するという▽椎茸の句はこのまま独居果てるのかというわびしさを恐れながら俳句を友としてゆくのかとぼんやり終幕を想像している不安。赤松もそういう不安を常に抱えて苦しんでいた▽勝子は各句会に出て仲間を集めたりかなり六花の会員獲得に力を入れている。その中で天才的な力時に出して楽しませてくれる大事な存在。

滝しぶき

秋夕日猫もしやくしもスマホ持つ
 虫の声つたなきながら始まりぬ
 とりあへず十句そろへて秋の昼

▼用事してして結局用事を残した皮肉な結果に終わる哀しさ。時間の余裕があると手掛けたら、それに時間を奪われて收拾がつかなくなった▽ボールペンで何を書いたのだろうか。実験によるとは二万一千字くらいは書けるらしい。蛭雪譚とほぼ同じである△川で遊ぶ子は気を付けたい。子供より大人の方が死ぬ場合が多い。子を救おうと焦るからだ。慌てて身の捨て方を間違え。心臓麻痺を起こす▽カナブンは家の埃に暴れるから爪に埃が引つかかる。よく見ている△滝の上から少年が飛び込んだ。四十十川の子供たちもそういうことをよくやる。主宰もやった。度胸試し△残暑の夜風はもう夜の秋である▽とりあえずと思つて作った句がわりといいものがある。

出口 誠

用事して用事に終はる夏休み
 ボールペン使ひ切りたる夏休み
 川の中歓声上げて裸の子
 ビールつぐ三分の二を泡にして
 かなぶんの足のほこりを取りにけり
 滝の上少年一人飛び込みぬ
 残暑かな夜風が顔に心地よく

廣畑 育子

公衆電話あと

百日紅公衆電話ありし跡
 朝刊のバイク青田を照らし行く
 我が町の畦に白鷺田に蛙
 麦わら帽被されてゐる川地蔵
 へくそかづら可愛と思ふ我が齡
 蓮の葉を飛込台にして蛙
 さやかなり蓮の葉裏の陽に透けて
 野薊の絮へばりつくフェンスかな
 頑張ろうぜと若き白シャツ唄ひけり
 大西瓜黒々育つ余所の庭

▽百日紅の花の下には昔公衆電話ボックスがあったのだろう。日影になつたかもしれない。若人の親に知られたくない電話もしただろう。だが、今は携帯電話で便利になつたが逆に不便になつたこともある▽川の側の地藏に地元の人が麦わら帽子をかぶせてあげた。奇特な人にお地藏様のご利益が必ずあるとか▽へくそかづらとは実に可愛らしいと思えるのはすごい。葉や茎、実が傷つくと思異がするが、古来から生薬として使われてきた植物でもあり化粧水やハンドクリームとしての使い方も。さらにおしゃれなインテリアとしても活用することができるという。名前もヤイト花にしてあげよう。薊の絮がとり付きやすいのは主宰を増やす戦術。▽よその西瓜は赤くて大きい。

平居 滯子

水府様

紫陽花を切つて水府に奉る
 長梅雨や本陣跡の昼灯
 河骨の葉脈見せてひるがへる
 円墳を囲む蒲の穂猷めく
 銀山の切羽の跡の滴れる
 待針を打つも最後の甚平かな
 爆心地近づけば止む蟬の声
 土用干し夫の遺愛のキスリング
 伊吹見ず琵琶湖に触れず盆過ぎる
 かなかなや御仏眠りに落ち給ふ

水府は水戸の異称であるが水神の住むという都の意味も。平居は堺市から句会に来るのも時間がかかるのに熱心に通つてくれる。滯子こそが水府さまである。紫陽花は身近に活けておくと守つてくれる。大切にしたい。近くの円墳を囲む濠に生えたガマの穂絮がけものようであるというのは当たっている。穂絮がほぐれるとベッド一人分は出来そう。▽銀山は多田銀山、生野銀山、などあるが私は多田銀山に行った。松本清張の小説「西街道奇譚」は銀山の役人の物語坑道に入ると句のように滴りがあるが鉱山人足の血のようにも思える▽爆心地(広島・長崎)に近づいたら蟬の鳴き声が一瞬止んだ。偶然かもしれないが爆弾が投下された一瞬の静寂であるような気が。夢風撰候補。▽キスリングは登山用の大きなリュックサックであるが画家の名前でもある。登山家の御主人は両方愛していたの

江見 巖

踊りの顔

石垣の海水上がる門火かな
 生身魂いつまでたつも弟よ
 踊る顔見合はすこともなかりけり
 流灯や渡月橋より覗き込む
 駄菓子屋の奥に虫籠置いてあり
 己の尾くるくるまはす猫じゃらし
 定食のAについたるとろろ汁
 ひぐらしや木の倒れ行く電気鋸
 睡蓮の底よりあぶく二つ三つ
 曼珠沙華畦の額縁もつれだす

▽海近くで門火を焚いているのは満ち潮が夕刻であることもわかる
 ▽踊顔とは盆踊りで隣の人と顔を見合すこともないと気づいたのは句の手柄。▽踊りの輪が一重であるど互いに同じ方向を向いて踊のだからである。作者の発見は大きい。この情景はさまざま鑑賞ができる秀句である。夢風撰候補
 ▽駄菓子屋の句は店主の暮らしぶりが見えてくる。店舗の佇まいも▽定職のAを注文したとろろ汁が付いていた。予想外の喜び顔が見えてくる。△電気鋸で伐った樹には蝉や蝸が鳴いていたのだろう。が倒されることはすでに知っているのだから▽田の額縁のように咲いていた曼珠沙華が終わり始めた。それがもつれだしたと表現。

延川五十昭

象 潟

象潟や西施の像に秋の蝶
 七夕や出雲崎なる昼の月
 象潟や九十九島の稲田道
 蚶満寺竜の彫物芭蕉の実
 人磨の姿うつせし井戸の秋
 早稲の田の松陰ながく秋日かな
 月山や雲の峰より昼の月
 海山千尋の谷鷹渡る
 山刀伐峠十二曲りや尾花道
 昼飯のいぶりがつことほつけかな

▽人麻呂が東北まで来ていたのかと、いう驚きと挨拶。文章上に残っているのは「猿丸」だが猿丸は柿本人麻呂であろうと推理している説もある。人命に動物や鳥類の名を冠せられるのは罪人と思われる。これは古代朝鮮の仕来りに習っている。例えば朝鮮語「ケトン」という人命は犬の糞という意味。月山の句芭蕉の句をふまえて詩情豊かな写生句に仕上がった。早稲の田の句も格調高く詠みあげている△山刀伐(なたぎり)峠の山道は細く怖いところ。交通の要所であるが難所で芭蕉は「高山森々として一鳥声きかず」と書いている。昔は強盗などもでた△ほつけは鎌倉時代、日蓮宗の日持上人が、蝦夷地を去る礼として、これまでいなかった魚を獲れるようにし、地元の人はその魚を「ホツケ(法華)」と名づけたという説やアイヌ語だという説もある。いぶりがつこは薫製の沢庵。

愛媛は

限られし日のたふとさや蟬の声
 百日紅空の青さの中にあり
 鶏頭や出石白磁に五六本
 鶏頭や愛媛は遠くなりけり
 墓に手を合はすや盆の風吹きぬ
 鐘の音の二拍三拍盆の入り
 雲の峰二つ残して浜暮るる
 暮れてゆく霧と汽笛の淡路かな
 薄墨の海峡カンナ群をなす
 夕影の底紅の白明か明かと

▽「鶏頭や」の句、や、けりの切れ字が二つあるがこれが「抱え字」の句で愛媛はの「は」。抱え字の手法をもって詠んだ▽百日紅の句は下から見上げると真っ青な空に紅色の花の対比が美しさを引き立たせている▽鐘の音を二拍三拍で捉えたのも面白い。鐘の音によって盆に入るといふのも▽霧と汽笛の句はリズムがよい。今月は配色に眼をつけて詠んだ句が多い。出石の白色、鶏頭の紅、雲の峰の白、霧の薄墨、海峡のカンナの紅色、むくげの底紅など、無意識にいろいろか色彩の変化に眼が向いているのも興味ある作品たちである。その上、「抱え字」を使ってみるなど挑戦的である。失敗を恐れずどんどん詠むのは上達のコツでもある。

鳥海山

待合の落ち鮎を売る最上川
 暑き日の入りて閑けき山の寺
 月山の胎内抜けて秋生まる
 雲の峰崩れし山は昼の月
 滝水に山の鼓動を聴いてをり
 滝水を離れて蟬の声溢る
 深き谷吹き上ぐ風の涼しかり
 北国の松秋風の美人かな
 象潟や九十九島は早稲の海
 早稲の香やみたび渡りし信濃川

▽北陸道の新潟県を通過するとき、信濃川を三度渡ったという。信濃川は何本あるの？と錯覚する。私は過去に二度渡ると思っていたが笹子は三度渡ったという。今年も早稲の香りする黄金の新潟平野が見事であった▽年代を重ねた見事な松に身体をくねらす美女を思った。芭蕉は西施を想い、笹子は、玉昭君・貂蟬・卓文を思い起こしたのであるう卓文君などは最高▽「深い谷とは」鳥海山の五合目から見下ろす噴火口の跡で怖いほど深い。それだけに吹き上げて来る風の涼しさは最高▽月山のトンネルを通過したとき笹子は胎内だと感じたのがさすが女性だと思ふ。暑き日は最上川で芭蕉が観じたが笹子は立石寺の暮れの閑寂を捉えた。▽滝水の句は鳥海山の伏流水が白糸のように噴き出しているところ。六甲は噴き出る水に視線がついてゆけずめまいがして滝道に転んだ。